

教科の中での言語活動で 考える力と表現力を養う

— 広島県立忠海高校の実践から —

新課程では、小・中・高のすべての学校段階で「言語活動の充実」が盛り込まれ、全教科・領域等で展開するようたわれている。高校では、現行課程でも「総合的な学習の時間」や小論文指導等で、「読む」「書く」「話す」「聞く」を行う活動は実践されているが、教科指導ではどのような言語活動が考えられるのか。実践事例から探る。

PISA調査で日本の高校生の「読解力」低下が課題に

新課程で「言語活動の充実」が打ち出された背景は二つある。一つは、2004年に文化審議会の答申「これからの時代に求められる国語力について」の中で、教育活動全体での「国語力」の重要性がうたわれたこと。もう一つはPISA（OECD生徒の学習到達度調査）の調査結果により、「読解力」に課題があると示されたこと（図1）である。新課程では、思考力、判断力、表現力を育成し、課題解決力を身に付けることを目標として「言語活動の充実」を掲げ、小・中・高すべての段階でその重要性を明示した。13年度に全面実施される高校の新課程でもその内容が盛り込まれている。

全教科・領域で「言語活動の充実」を展開

「言語活動」は、「話す」「聞く」などの「言葉による活動」と捉えられる。新課程では「言語活動の充実」を全教科・領域等で展開す

るよう明記された。例えば、数学では「自らの考えを数学的に表現し根拠を明らかにして説明したり、議論したりすること。」、理科では「各科目の指導に当たっては、観察、実験などの結果を分析し解釈して自らの考えを導き出し、それらを表現するなどの学習活動を充実すること。」とその重要性が明示されている（*）。

このような活動を従来から実践してきた教師は少なくないが、新課程を機に改めて「言語活動」の内容を振り返り、より効果的な活動にしたい。今号では、各教科で言語活動を取り入れ、思考力、表現力を育成している広島県立忠海高校の実践例を紹介する。

図1 PISA調査における日本の結果
2006年調査と2000年調査（読解力）の比較

	2006年	2000年
日本の得点	498点	522点
OECD平均	492点	500点
OECD加盟国中の順位	12位	8位
全参加国中の順位	15位	8位

出典／「OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2006年調査国際結果の要約」より抜粋

*文部科学省「言語活動に関する学習指導要領改訂の記述例【高等学校】（抜粋）」より

広島県立忠海高校

「ことばの教育」に 全教科で取り組み 考える力と表現力を育てる

「なぜ」という問い掛けから
相手に伝える力を養う

広島県立忠海高校が学校教育全体で言語活動を取り入れたのは、2005年度から3年間、広島県教育委員会「ことばの教育」の研究校に指定されたのがきっかけだ。同校のある竹原市忠海地域の小・中学校と連携し、「各教科における、ことばの力を土台とした指導方法の工夫・改善」教科目標達成のための有効な『言語技術』の活用をもとに「を」を主題として、言語技術を教科学力の向上に生かす方法を研究してきた。

07年度に研究指定は終えたが、現在も研究の成果を基に、「総合的な学習の時間」や小論文指導、教科学習と、学校教育全体で言語活動を取り入れている。進路指導部主任の石村まさみ先生は、その狙いを次のように話す。

「本校は1学年2クラスと規模が小さく、生徒と教師の距離が非常に近いのが特色です。生徒が教師の指導によく応えてくれる半面、両者がなれ合ったり、多くを語らなくても意思疎通が出来るという面もあります。この地域の小・中学校も同じような環境であり、そのため、自分で考える力や

他者に伝える力が十分に育つているとは言えません。生徒の多くは高校を卒業したらこの地を離れます。社会で生き抜くために、自分でしっかり考え、自分の言葉で伝えられる力を付けさせたい。研究校に指定されて以来、この思いは継承されています」

同校は、日常会話から生徒に筋道を追って話をさせる指導を徹底している。例えば、生徒が職員室に来たら、名前と誰にどのような用事があるのかをはっきり言わせる。「先生、鍵」とだけ言う生徒には「どこの鍵を何のためにどうしたいの」と問い返すのだと、教務部主任の有木克明先生は話す。

「授業でも職員室でも、生徒との会話では意識して『いつ、どうして、なぜ』と問い掛けるようにしています。生徒は初め、どうしてそう問われているのか分からないようですが、教師が辛抱強く繰り返すことによって、他人に伝わるように話すにはどうすればよいのかを考えるようになります。1年生の時には単語の羅列でしか返答できないような生徒でも、2年



広島県立忠海高校
有木克明 Ariki Katsuki
教職歴13年。同校に赴任して5年目。教務部主任。担当教科は理科。



広島県立忠海高校
石村まさみ Ishimura Masami
教職歴9年。同校に赴任して6年目。進路指導部主任。担当教科は英語。



広島県立忠海高校
兼田修一 Kaneda Shuichi
教職歴19年。同校に赴任して9年目。総務企画部。担当教科は理科。



広島県立忠海高校
西岡隆史 Nishioaka Takashi
教職歴7年。同校に赴任して3年目。教務部。担当教科は数学。

広島県立忠海高校
旧制中学を前身とする、110年以上の歴史を持つ伝統校。瀬戸内海に面した自然環境に恵まれた地にある。
全日制／普通科／共学／1学年約80人
2010年度の合格実績◎国公立大は、広島大、山口大、愛媛大などに11人が合格。私立大は、関西大、近畿大、広島女学院大などに延べ62人が合格。

生になる頃には文章で話せるようになっていくのです」

定期考査には
全教科で論述問題を出す

学校全体で取り組む教科の中で

図2 定期考査での記述・論述問題の例

数学I

$\sqrt{8+2\sqrt{15}}$ の2重根号をはずせ。ただし、2重根号をはずせる理由も述べる。その際に $a^2+2ab+b^2=(a+b)^2$ を利用すること。

化学I

A君が一人暮らしをすることになりました。新しい家のガスコンロを買うのに、都市ガス（主成分メタン）用を買えばいいのか、プロパンC₃H₈ガス用を買えばいいのか、迷っています。あなたの方で、どちらを買えばいいのか、化学的理由付けをして教えてあげてください。

英語I

（英語の課題文を示した上で）伝来した当時のスシは、どのようなものでしたか。本文に即して45字以内の日本語で答えなさい。

英語II

（英語の課題文を示した上で）下線部①の that が示す内容を本文に即し35字以内の日本語で答えなさい。

家庭基礎

「たんぱく質の補足効果」について説明しなさい。

保健体育（1年生）

「受動喫煙」について、何が問題なのかも含めて説明しなさい。

保健体育（2年生）

「中高年期に、はりのある生活をおくるために」というテーマで、次の3つのキーワードを入れて文章をつくりなさい。

キーワード：①役割 ②生きがい ③存在感

*学校資料を基に編集部で作成

の言語活動の一つとして、定期考査に全教科で論述問題を必ず1題以上出すことが挙げられる（図2）。保健体育や家庭科など、論述問題を取り入れるのが難しい教科では、用語説明などを出題する。理科担当の兼田修一先生は、それでも効果はあると話す。

「知識の定着を問うのであれば選択式という方法もあります。しかし、記述式であれば、たとえ暗記したことでも、自分が得た知識を言葉にして説明するわけですから、より深い理解が必要となり、

学習の定着が促進されるのです」定期考査後は、教科ごとに正答率、解答率、無回答率を算出して分析する。着目するのは無回答率だ。白紙での提出は、考えることを諦めたことになる。最後まで考えさせるにはどうすればいいのかを検討し、授業の改善に生かす。また、論述式に慣れていない1年生は特に空欄になりやすい。最初は数か所を虫食いにした文章の穴埋め問題を出すなどして、徐々に論述問題に慣れ、自分の言葉で書けるようになる工夫をする。

授業で行う言語活動の工夫と具体例

■身近な話題を取り入れ、自分の知識と結び付けて考えさせる

授業に言語活動をどう取り入れるかは、個々の教師に任されている。理科担当の有木先生は、授業に身近な話題を取り入れ、生徒の関心を引きつけると共に、生徒の持つ知識と結び付けて考えられるよう工夫する。そして、それらの話から定期考査の論述問題を出す。

「前任校でも生徒に身近な素材を取り入れて話そうとしていましたが、本校に赴任してからは、それが『ことばの教育』であると意識するようになりました。身近な話題を授業に盛り込むことは、生徒の関心を引く効果があるだけでなく、生徒が自ら考えるきっかけになると再認識したのです」

■他人に説明することを目標に言語化させる

数学では、09年度に西岡隆史先生が「ことばの教育」をテーマに研究授業を行った。まず生徒に定積分で関数のグラフで表される図

形の面積を求める問題の解説を配布し、「この問題を他人に解説できるように分析してレポートにまとめよう」と宿題を出す。宿題は2日後の授業に持参させ、グループ内で発表し、どの解説が分かりやすいかを話し合う。その後、グループの代表が全体発表し、クラス全体で検討した。

「『他人に説明すること』を目標に、まずは1人で考え、それをグループで発表し、質問に答えるという言語活動を設定しました。私が良い解答として皆の前で発表したのは、配布した問題では曖昧にされていた点に疑問を持ち、自分なりに解説を加えた生徒のものでした。問題文をきちんと読み取り、課題意識を持って取り組みたいレポートを評価したのです。結果的に、必ずしも数学の成績が良い生徒が良いレポートを書くのではなく、じっくり考えることが出来る生徒が良いレポートを書いています。こうした生徒が大学での学びや社会で力を発揮していくのだと思います」（西岡先生）

■発表を意識させ、実践力につな

図3 英語の授業における言語活動の例

学年	内容	目的
1年生	“Japan to the World” Project 日本について外国の人に紹介するプレゼンテーション活動	自分が調べたことに対して、自分の考え・意見を書き、話すことができるようになる。また、話されたものを聞き取ることができる力を身に付ける
2年生	世界遺産ツアー 世界遺産について調べてそのツアーを企画し、プレゼンテーションする活動	自分が調べたことに対して、自分の考え・意見を書き、話すことができるようになる。また、話されたものを聞き取れるようになる。論理展開に注意し、意見などを効果的に伝える表現を使うことができる（聞き手を意識させる）
	英作文コンテスト 与えられたトピックについて自分の意見を書く。事前に論理的な文章の書き方などを指導する。優秀な作品は県の英作文コンテストに出品する	自分の考えを適切に伝えることが出来る。考えの論拠・理由を示すことができるようになる
3年生	予想問題作成 定期考査の問題をグループで話し合い、検討して作成する	問題解決の過程の中で、他者と協同して課題を解決することができる

*学校資料を基に編集部で作成

がる指導を行う

英語では、元々行ってきた実践的な英語を身に付けるための活動を「言語活動」の観点で捉え直したことで、活動の目的が一層明確になった(図3)。生徒に対して、発表をより意識させて指導するようになったと石村先生は語る。

「生徒に『発表』という場を何度も与えることは、学習の定着という効果だけでなく、生徒が主体的に活動に取り組むようになるという成果も生まれました。恥ずかしい

「なぜ」という問い掛けも言語活動の一つ

「ものは出せないと内容を吟味しますし、発表に向けて発音練習もします。目標に向けて計画を立て、実践し、次の活動ではその反省を踏まえて取り組めるようになります。また、発表が評価されたという達成感も次の学習の糧となる重要な要素です」

各教科で行われている言語活動の共通点は、これまでの指導を見直し、言語

活動として再構築していることだ。新たな活動を取り入れるのではなく、授業中に要所で問い掛けや発表を行い、生徒に考えさせ、表現させることを一層重視している。

「理科での言語活動には実験のレポートが挙

げられます。結果を自分の知識を集めて仮説を立て、自分なりの論理をつくり上げていくプロセスが大切です。それを普段の授業でも行えるよう、『なぜ』と問い掛け、生徒に発言させるように心掛けています。答えを間違えても、どうしてその答えに至ったのかを説明できれば、それも一つの学びの成果だと考えています」(兼田先生)

グループ学習を言語活動の一環として行うのも、大きな特徴だ。

「二つの目標に向けてグループで協力し、調べ、話し合い、発表のために文章にまとめる。まさに、自分で考え、相手に伝えるように表現するという過程を体験できます。同じ言語活動でも、小論文の作成は家庭で1人でも出来ますが、グループ学習は学校でしか出来ません。生徒の力の伸長のためには、普段の授業を少しづつ削って時間を捻出してでも取り組む価値があると思います」(有木先生)

言語力はすべての力の土台

進度の都合を考えると、すべて

の授業で言語活動を実践するのは難しい。しかし、今後出来る範囲で続けたいと有木先生は話す。

「中学校の先生に、本校に通う卒業生が中学時代と比べて積極的に話すようになって驚いたと言われたことがあります。自分の意見を書いたり発表したりすることで、2年生になればしっかりと話が出来ようになります。進学面でも実績は伸びています。それは、一般的に言葉の力が求められるといわれている推薦入試やAO入試での実績だけではありません。一般入試でも言語活動を充実してきた成果が表れてきました。言語力はすべての力の土台になります。研究授業などを通して言語活動の意義を伝え、授業に無理なく取り入れられる方法を模索したいと思います」

更に石村先生は、新課程を指導を見直す機会にしたいと言う。

「新課程では、言語活動の充実が一層求められています。これを機に、生徒に本当に必要な指導は何かを精査し、取り組みを再定義したいと考えています」

「理科での言語活動には実験のレポートが挙げられる。結果を自分の知識を集めて仮説を立て、自分なりの論理をつくり上げていくプロセスが大切です。それを普段の授業でも行えるよう、『なぜ』と問い掛け、生徒に発言させるように心掛けています。答えを間違えても、どうしてその答えに至ったのかを説明できれば、それも一つの学びの成果だと考えています」(兼田先生)